

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 24 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370270

研究課題名(和文) イギリス・ロマン主義のグローバルな多様性 ヨーロッパを超えた継承と変容

研究課題名(英文) Global Diversities in British Romanticism

研究代表者

アルヴィ なほ子(宮本なほ子)(Alvey, Nahoko)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：20313174

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、18世紀後半から19世紀前半の様々な「他文化」を国内外に抱え込んだイギリス・ロマン主義の時代の文学が、他地域の文化・文学に接触し、変容し、新しい形態を生み出す過程を、文学空間の外部へと開いて総合的に研究する試みである。イギリス・ロマン主義の文学が、イギリスを超え、ヨーロッパへ、さらにヨーロッパ文化を前提としない文化圏・文字圏の後継者と「協働」的な影響関係の中で、新しい変容と創造を生み出すとき、きわめて現代的な問題が浮かび上がる。その様相を検証することで、イギリス・ロマン主義文学が、21世紀的な人文知のあり方において有効なモデルであることを確認した。

研究成果の概要(英文)：This research offers a comprehensive view of the ways in which literature in the age of British Romanticism produced new literary modes and forms through contact with various “other” cultures and literatures from the latter half of the 18th century to the early 19th century. It examines the unexpected shapes that literary works in the Romantic period took when taken to areas beyond England and acclimatized in response to existing literatures and cultures. It reveals a complex cluster of influences and inspirations working across the British and colonial/non-European literary traditions. It considers this kind of complex influences and receptions as based on “synergy” rather than one-way influences and this interactive relationships between influencing cultures and receiving ones as relevant to problems that are occurring in our age. It proves that models that offered in the age of British Romanticism can offer effective models that are valid in the humanities in the 21st century.

研究分野：イギリス・ロマン主義

キーワード：イギリス・ロマン主義 他文化 人文知 イギリス文学

1. 研究開始当初の背景

18世紀後半、現代に繋がるグローバリゼーションの初期の形態が地球規模で様々な新しい問題を生み出していたことを踏まえて、イギリス・ロマン派の文学研究が、グローバル化する現代の状況視野に入れてイギリスやヨーロッパ以外の地域や文字圏も異なる地域へ研究の視野に入れるようになってきた。英文学を(自)国文学として研究するイギリスやアメリカでも、それまであまり研究されてこなかった南半球の植民地への影響、アジアの文字圏も異なる地域での受容と変容を考察することがグローバルな英文学研究の中で意義を持ち始めたことから、この研究テーマを設定した。

2. 研究の目的

本研究は、18世紀後半から19世紀前半の様々な「他文化」を国内外に抱え込んだイギリス・ロマン主義の文学が、他の地域の文化・文学に接触し、変容し、新しい形態を生み出す過程を、グローバリゼーションの一つの形態と捉え、文学空間の中で詩人(小説家)と後代の詩人(小説家)の関係において考察される「影響」の問題を、文学空間の外部へと開いて総合的に考察することを目的とする。

3. 研究の方法

文学空間の中での作品の位置づけを行い、それを文学空間の外部へと接続させるため、相互関係のある2つのアプローチを取った。文学を外部と接続させるために創作者が執筆をする時代の3つの大きなコンテキストと作品を結びつける一方で、テキストと文学を生み出す創作者の内面を歴史学的手法を取り入れる方法を取った。

- (1) 3つの大きなコンテキストとの関連
一つ目として、1798年というイギリス・ロマン主義文学の始まりとされる年から約30年のイギリス・文学の中で詩が最も重要だった時代の文学とその時代の重要な政治的コンテキスト、特に国際関係の中で文学を位置づけた。イングランドを超える地域との関連での2つの重要な問題として、フランス革命からナポレオン戦争にいたる問題、その問題とも密接に関わるイングランドが対内的に抱え込んだアイルランド問題の中で文学を考察した。

二つ目として、イギリスとフランスとの植民地獲得競争の中で、イギリスが植民地化を図り、かつ文化を輸出しようとしていた南半球でのイギリス・ロマン主義文学の受容と変容について狭義のイギリス・ロマン主義の文学が終わった後の

19世紀半ば以降まで含む時間軸の中で考察した。

三つ目として、南半球をさらに越えた地域にもイギリス・ロマン主義文学が伝播した19世紀末以降に関して、その政治的、文化的影響について、明治期の日本での受容と変容について考察した。ロマン主義時代から約100年後の世紀の転換期までを中心に、ヨーロッパの彼方の非西洋圏でのイギリス・ロマン派の変容を代表的なイギリス・ロマン主義時代の作品の海外での受容と変容という観点から作品の精読と大きなコンテキストの中での位置づけを行った。

- (2) テキストと文学を生み出す創作者の内面を結びつけ、テキストを単に同時代の共時的な流れの中での生成物と見るだけでなく、「影響」の問題をより複眼的に見るために、カルロ・ギンズブルグの「マイクロヒストリー」的な文献学的方法のアプローチを応用した。

4. 研究成果

イギリス・ロマン主義とイギリスを超えた地域との影響関係について、

- (1) 平成26年度、東京大学で開催された国際学会で、海外の多くの研究者と意見交換する機会を持ち、フランス革命からナポレオン戦争にかけての時期、イギリス、フランス、アイルランドの複雑な政治的関係の中で、イギリスの植民地政策が海外に進む前段階としてのアイルランドへの干渉の中で、イギリス・ロマン派の詩人たちがイギリスのアイルランドへの圧力、アイルランドの内乱へ文学的反応をし、アイルランド文学と交互の影響関係を結ぶあり方への示唆を得た。狭義のイギリス・ロマン主義が始まる年は、イギリスのアイルランドへの干渉でも重要な年であることを確認し、研究調査を続け、イギリス・ロマン主義の時代からヴィクトリア朝にかけてのイギリス文学とアイルランド文学の複雑な交渉関係をイギリス・ロマン派詩人たちがロバート・エメットの処刑から受けた衝撃と影響、パーシィ・ビッシュ・シェリーのダブリンでの演説、アイルランド詩人ジェームズ・マンガンへのイギリス・ロマン派詩人の影響の観点から考察した。
- (2) (1)で行った研究・調査の成果を平成27年度も続け、10月に奈良教育大学で開催されたイギリス・ロマン派学会第41回全国大会シンポジウム「アイルランドとロマン主義—「国民国家」と文学」において、「1812年のアイルランド」として発表した。アイルランドは、この後、イギリス・ロマン派の文学を大学の制度の中でイギリス本国よりも早く研究するようになる。ダブリンのトリニティ・カレ

ッジの初代英文学教授エドワード・ダウデンは、イギリス・ロマン派の研究者で特に 1812 年にダブリンで演説をしたパーシ・ビッシュ・シェリーの研究の先鞭をつけた。夏目漱石がイギリスに官費留学した際、ロンドン大学に最終的に落ち着く前に、ダウデンに師事することを真剣に検討したことからもうかがわれるように、イギリス・ロマン主義の海外へ影響関係を考える際、イギリス・ロマン派の研究がイングランドの伝統ある大学ではなくイギリスの周辺地域で先に始まったことは重要であり、このことは、イギリス・ロマン派の意義を現代に接続する際に、ヨーロッパの内にありながらその外部であるような非常に重要な地政学的・文化的地点があることに確認になった。

- (3) (2) の研究成果を踏まえ、平成 28 年度は、アイルランドの内乱をかかえたイギリスは、同時期に対外的にはナポレオン戦争の最中であつたこと、その勝利の方向を決定づけたナイルの海戦がエジプトのアブキール湾で行われたことに注目した。つまり、狭義のイギリス文学で、イギリス・ロマン主義の開幕の年とされる 1798 年は、政治的には、ナイルの海戦の年であり、イギリスとフランスとの長い戦争が大きな転換を迎えた年でもあつた。このことは従来の英文学研究では等閑視されていたが、戦争が文学に大きな影響を与えたことを、この時期の桂冠詩人、ラディカルなイギリス・ロマン派の詩人たち、また、圧倒的に男性詩人の研究が中心だつたイギリス・ロマン派研究の中で遅まきながら注目を集め始めた女性詩人たちがどのように文学化したか、イギリス海軍資料、フランス側の資料、イギリス・ロマン派詩人の詩、散文作品、ネルソンの伝記などを検証して考察した。その成果の一部は、9 月に、同志社大学で開催された関西コールリッジ研究会第 171 回例会の特別講演「風に聞け ナイルの海戦とイギリス・ロマン派詩人」として発表した。この口頭発表後の質疑応答から得た知見も取り込み、この成果をイギリス・ロマン派のナイルの海戦の文学的な再構築、その 19 世紀後半、20 世紀での受容の変化、イギリス、オーストラリアの 20 世紀、21 世紀の歴史小説でこの問題がどのように扱われるかを考察し、論考「風に聞け ナイルの海戦とイギリス・ロマン派詩人」にまとめた。
- (4) 平成 29 年度は、研究の最終年度なので、以下の 3 つの方向からこれまでの研究をまとめた。

昨年度の「風に聞け ナイルの海戦とイギリス・ロマン派詩人」を女性詩人フェリシア・ヘマンズの異文化理解の観点の焦点を当てて、21 世

紀の受容、特に教育の場で、異なる文化圏・文字圏でイギリス・ロマン主義をどのように他 / 多文化的環境で活かせるかについて「教室のフェリシア・ヘマンズ」という論文にまとめて発表した。

南半球のマオリの文化が 18 世紀末から 19 世紀末にイギリス人たちに与えた影響から生まれたニュージーランド人(マオリ)の表象が、それまで北アメリカの先住民の表象が担っていたイメージに代わって 18 世紀後半以降重要なイメージとしてくり返し使われることになることの文化的意味づけを行った。このような表象の変化を「南半球のヒューム」というイメージを用いたエドワード・ギボンの『ローマ帝国衰亡史』政治的動向に敏感に反応して書かれたホラス・ウォルポールの書簡、イギリス・ロマン主義の女性詩人アナ・バーバルド、パーシ・ビッシュ・シェリーの作品、ロイヤル・アカデミーの建築学教授となる建築家ソウンの助手ジョセフ・ガンディの描いたロンドン銀行の透視図を経て、ヴィクトリア朝のトーマス・バビントン・マコーレーの「ロンドン橋のニュージーランド人」へと至る変遷をミクロヒストリーの方法を用いて跡づけ、また、マコーレーのイメージを視覚化し、以後イギリス人の心象風景に定着したギュスターヴ・ドレの「ロンドン橋のニュージーランド人」が完成するまでの視覚イメージの変化とその意義を検証した。

イギリス・ロマン主義時代の文化・文学の後代への影響、特にヴィクトリア朝から 20 世紀前半への影響の考察を、異なる文化圏、文字圏へのイギリス・ロマン派の思想と作品の影響という観点から行った。このテーマは、研究の初年度から着手されていたが、英語圏のヨーロッパ以外の地域に関して行った。同様の研究テーマはすでに前年度より着手されていたが、日本の明治期の西洋文明の導入の中で、文学の分野での英文学、特にイギリス・ロマン主義の影響関係を島崎藤村と夏目漱石を中心に考察し、この成果を英文の論文に纏めた。この論文は、英国の出版社 *Asian Romanticisms: The Reception of British Romantic-Period Literature in India and East Asia* という論文集に収録され今年度末か来年度に出版される予定となった。

これらの成果により、イギリス・ロマン主義の作品が、ヨーロッパを越えて他 / 多文化へ

と持ち出されるときに、英文学の「正典」とその階層性を前提とする「影響」の理論では捉えきれない、衝突や変容が起こること、ヨーロッパ文化を前提としない異なる文化圏・文字圏での受容の際には、複数の文化の共働的な関係が作用することを検討することができ、その中できわめて現代的な問題が浮かび上がった。このことによって、イギリス・ロマン主義が、多様な文化的背景の中で常に交渉を行うことになる 21 世紀的な人文知のあり方に、有効なモデルとなりうることを示すことができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

アルヴィ宮本なほ子. 「古の国への旅人」——アディソンの旅人からドレのニュージラランド人まで、『ODYSSEUS』、査読無、22 号、2017、pp.81-103、

アルヴィ宮本なほ子、風に聞け ナイルの海戦とイギリス・ロマン派詩人、『ODYSSEUS』、査読無、21 号、2016、pp.57-78、

〔学会発表〕(計 2 件)

アルヴィ宮本なほ子. 「ナイルの海戦とイギリス・ロマン派詩人」 関西コールリッジ研究会 第 171 回例会・特別講演. 同志社大学寒梅館 2016 年 9 月 24 日

アルヴィ宮本なほ子. 「1812 年のアイルランド」 イギリス・ロマン派学会第 41 回全国大会シンポジウム「アイルランドとロマン主義—「国民国家」と文学」奈良教育大学 2015 年 10 月 18 日

〔図書〕(計 1 件)

アルヴィ宮本なほ子、他、白水社、『分断された時代を生きる』(「マクレーが未来に託す言葉 「フランダースの野に」を読み継ぐ試み」)、2017、200、pp.110-22.

6. 研究組織

(1)研究代表者

アルヴィ なほ子(宮本なほ子)(ALVEY, NAHOKO)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：20313174